

三田 粉川さんはケータイも持ちませんよね。ダウン・サイジング全体に懐疑的なんですね。

粉川 ケータイを持たないのはいきなり呼ばれるのが嫌だからにすぎません。いま、多くの人は、デスクトップ・コンピュータのブラウザを立ち上げてWebを見るよりも、スマートフォンでSNSを覗く。スマートフォン小さい画面にすりよってSNSは、当然、長い文章を嫌う。SNSを常用すれば、長い文章を一つ書き、読むよりも、短い文章をたくさん書き、読むことを好むようになる。時流に乗るということなら、15年も続けている《シネマノート》や《雑日記》(巻末付録参照)も、FacebookやTwitterに断章を分載すればいいのでしょうが、それはやりたくない。とにかく、自分でDIY的に構築したのでない枠のなかで表現するのは避けたいのです。

三田 SNSの利用は、しかし、東日本大震災を機に

ないからです。ヒキコモリがいま、否定的・消極的にとらえられるにしても、どのみち10年後には、ヒキコモリが「普通」になり、20年後にはヒキコモリの彼や彼女が「支配階級」になる。80年代にはまだ、非難の対象だった「オタク」がいま「支配階級」であるように。

三田 放射能に限らず、過敏だからヒキコモルという面はあるかと思えます。何に対して過敏なのかは人それぞれなのかもしれませんが、いまの日本では活かされない能力であることは確かでしょう。

粉川 ヒキコモリは、内発的にあるいは突然変異的に生じたわけではないんです。ヒキコモリを生み出す環境として、まず、ヘダメな奴はおとなしく家で引きこもっておれ」という暗黙の命令がある。資本主義システムにとって、1%が支配し、99%が嗜眠的状态にいるというのが理想ですから。実際に、こうしたシステムが高度化するにつれて、働きたくても働く機会をあたえられない人間の数

飛躍的に増大します。そうはいっていられなかった面があったということですよ。あからさまな質の転換というか。

粉川 2011年は、福島原発事故によって、日本にとってだけではなく、世界にとって時代を画する年になったと思いますが、一番早く反応したのは、ヒキコモリ系の人たちでした。あくまでわたしの知り合いの範囲内ですが、そのなかのヒキコモリ系の人たちは、一様に「放射能による体調不良」を訴えた。最近、ダルかったり、咳がひどくなったり、炎症がなかなか治らなかつたりするというのです。

三田 外に出られる人はその時点で、放射能に対して過敏ではないということですからね。

粉川 それが医学的に信憑性があるかどうかはどうでもいいんです。この世界は、「われを感じる、ゆえにわれあり」であって、「客観性」などは意味が

は増えた。いま、企業で働いている人の多くは、ある種の「チャリティ」として働き口をえているにすぎない。働かなくてよいのなら、遊ばせてくれればいいのだが、そうはしないところが資本主義の矛盾である。労働が遊びに転化する条件(ワーカーからホモルーデンスへ)はすでに整っているのに、そうしたら資本主義ではなくなるからそうはしないんですね。

三田 有能な賃金労働者が遊ぶしか能のない若者にダメ出しし続けていたのが、最後で一気に逆転するというのがダニー・ボイル監督『ヴァキュミンダ』(2001年)でした。これがファンタジーではなく、社会モデルとして機能すれば、イギリスは復活できるかもしれないし、実際、ロンドン・オリンピックの演出をダニー・ボイルに任せたとする時点で、イギリスは本気かもしれないと思わせるものがありました。日本だとゆとり教育は少しでもそうした方向に向かっていたのかもしれないが、再び、工場労働者を大量生産するような

教育方針に戻ってしまったので、「能のない若者」像は変化しようがない。それこそ三浦大輔監督『ボーイズ・オン・ザ・ラン』（2010年）を『ヴァキュウミング』との対比で見ると、異常なほどの閉塞感だけが残ってしまう。

粉川 そのような条件のもとでは、いやいや働くか、さもなければヒキコモリになってしまうかしかないんですよ。ヒキコモリとは、ある種のストライキです。集団ではなく、個人で行なうストライキ。ストライキというのは、「連帯」して行なうものだったんですが、いまや「社会」が個々人の鞆帯ではなくなり、ある特定の社会を背景にした「連帯」は不可能・無意味になってきた。形だけの「連帯」は組める（多くの「デモ」がその例だ）が、そこから特定の「社会」が浮かび上がっては来ないんです。

三田 逆に言う個人でいられる力が強いともいえる。欧米の映画ではよく3人の人物がいて、そのうち

空虚さを秘めている。本格的なヒキコモリはデモには行きませんが、リモートではネットワークを組んでいる。それは、自分で思い込めばメンバーになりうるフリーメイソンのようなネットワークかもしれない。だから、このネットワークは、いまの電子的なネットワークでは決して代替できない要素を持っている。

三田 パットとはイメージしにくいネットワークのあり方ですね。まったく集団性というものを感じさせなかったフィッシュマンズのファン層を思い出しました。

粉川 しかし、権力システムというものは、時代の趨勢を読み、自分を危機に落とすような要素を取り込むことによって生き延びる。ヒキコモリは、ある意味では資本主義システムの危機要因でした。だけど、それが、いま、SNSの普及によって回避されつつある。「ヒキコモリよ、SNSに集合せよ」、これがいまのシステムのスローガンですね。

の一人に「しばらく席をはずして下さい」というと、すぐにその人は外に出て行きますが、日本の映画では会社の幹部がえぼっているものでなければ、「席をはずしてくれ」と言われた人が真っ青になったりして、「中座」することかなりの抵抗がある社会だということが見て取れます。でも、たぶん、ヒキコモリの人はさっさと出て行けるタイプなんだと思うんです。中座する能力が高いともいえる。

粉川 ヒキコモリには一方的にあてがわれる「社会」がないからです。何か鞆帯のようなものがあるとしたら、リモートなネットワークである。今日のデモがTwitterやFacebookでつながっているというのは、実際にそうである以前に、その「連帯」が、かつてサルトルが言った「融溶集団」ではなく、あいだに「距離」と隙間を内包したりリモートネットワーク的なものになったからです。ドロップと一つになるのではなく、どんなに「熱く」結びあったとしても、その内部にシラツとした要素と

三田 レクター博士も使いようでしたからね。

粉川 そして、今後20年のあいだに、SNSないしはSNS的なものが、これまでの「社会」(Society)にすりかわり、そういう形で組織されたヒキコモリが、「支配階級」になるというわけです。SNSの最初のSは、むしろ、SocialのSですが、もし、Socialなもの(Society)が有効性を維持しているのなら、あえて、Socialと言う必要はない。そういえば、「社会主義」は、「社会」の終わりから始まった。それは、資本主義の危機でもありません。資本主義はそれを取り込んで生き延びてきた。だから、いまの資本主義にとって「社会的なもの」は不要なんです。

三田 社会とは異なる個人のつながりを解明しようとするのが、現在のマーケティングですからね。東北の地震や福島の事故も「がんばれ、日本」という呼びかけは意外と素通りしている印象もあって、